

佐井寺の守り神・向かい坂地蔵



13体の地蔵さまが旧佐井寺村の南入口に並んでいる

吹田の名勝、佐井寺の南の入口に「向かい坂」という峠がある。そこに、佐井寺に参詣する人々を見守る13体の地蔵が並んでいる。この地蔵たちは「向かい坂地蔵」、あるいは「村はずれの地蔵」とも呼ばれてきた。それぞれ、かわい前垂れを掛けられ、今でも近所の人たちの手で守られている。その表情は、雨や風にさらされ擦り切れていて、よく分からないが、ただならぬ気配が伝わってくる。僕の心はドキドキと鼓動を打ち始めた。この鼓動は何なのだろう。今回は、「向かい坂地蔵」の来歴を訪ね、その魅惑に迫ってみることにしよう。

新山ひろし

「向かい坂地蔵」は「道標地蔵」である

「向かい坂地蔵」は、いつのころか、近くの茶畑からゾロゾロと掘り出され、この地を集められて祀られるようになったという。真ん中に鎮座する、大きめの地蔵に



まんなかの地蔵には左に「きしべ」右に「吹田」の文字が刻まれている

は「享和3年(1803)・文化7年(1810)」と年号が彫られている。そして、その顔の左に「きしべ」、右には「吹田」と刻まれている。なるほど、この地蔵たちは道標の役割をしているのだ。

向かい坂地蔵のある場所は、旧佐井寺村の南口にあたる。そこは、佐井寺観音に至るための二つの「信仰道」が一つに出会うところである。ひとつは「岸辺」から佐井寺へ向かう道、もう一つは「吹田」方面からの道である。いずれも亀岡街道から西に分岐して佐井寺に向かう道で、その分岐点にも石の道標が置かれていた。「向かい坂地蔵」の役割は、信仰道を歩いて来た人を迎えるということであるようだ。佐井寺は、かつて、熱烈な観音信仰の流行で驚くほどの賑わいをみせたという。その佐井寺観音の霊験とはどのようなものか

佐井寺観音は水の化身だった

民家の間を抜けて佐井寺への丘を登ると、急な石段の前に出た。その石段の上に佐井寺の本堂が現れた。吹田市立博物館の『歴史散歩』によれば、佐井寺は「元禄5(1692)年の記録には、天平7(735)年に行基が寺より西の山に瑞光を見て、土中より柵の十一面観音像を掘り出し、この観音像を本尊にして現在の七堂伽藍を建てたのをはじまりとし、山田寺(さんでんじ)と名乗った」とある。

佐井寺は近所では今も「さんでんさん」と呼ばれている。そして、「さんでん、さいでん、月夜でやける」という言葉が昔から伝わっているように、佐井寺(山田寺)では、月の光でも土地が焼ける、つまり、土地が乾いて作物が獲れなかったのである。そんな佐井寺に行基が訪れ、土の中から水の湧く場所を探り当てた。それが吹田三名水の一つ「佐井の清水」である。行基の水の湧く場所を探り当てる能力は、なにか「科学的」な

根拠があったのだろうか。その疑問はさておき、言い伝えでは、その水で顔を洗ったら、目の病が治った人が出て、いつしか、佐井寺観音は病を癒すパワースポットとなっていた。

佐井の清水を飲んでみた

行基が土の中から掘り出した十一面観音とは、言わば「佐井の清水」そのもの、つまり、観音は水の化身であるということになる。そして、その水を求めて、巡礼者が信仰道にひしめき、わが「向かい坂地蔵」の歓迎を受けたのである。本堂の側の井戸に、今でも「佐井の清水」の湧水が引かれている。龍の口から「佐井の清水」が出っぱなしになっている。「飲んで大丈夫ですか」と、側におられる



龍の口から少しずつだが佐井の清水が流れ出している。うまい水だ

若いお坊さんに聞いてみた。すると、「飲めますよ。どうぞたくさん飲んでください」という返事。ひしゃくに組んで、グイと飲んでみた。ミネラルが豊富な感じ…のどが潤っていたこともあるが、体の中にジンワリと沁みていく。そして、なんだか自分の体が清らかになっていくようで、わずかに、巡礼の人々の衝動に共感できた気がした。

地蔵さんって何だ

また、この寺では、9世紀ごろの作とされる木製の地蔵菩薩像が伝来している。佐井寺の地蔵信仰の歴史が、そうとう古いもので、この地が、早くから聖地として存在していたことを示している。そして、今もなお、佐井寺の本堂の横には、近辺にあった地蔵が集められ、一堂に祀られている。数えれば約170体だったと「佐井寺風土記」は、伝えている。さて、僕は、佐井寺の丘を下り

地蔵と人とのつながりは…

て再び、向かい地蔵の前に立っている。改めて、この地蔵を見つめると、なんだか、ありがたさが身にしみてくる。そもそも、地蔵って何なのだろう。「地蔵菩薩本願経」という経によれば、「大地の中にあってどんな苦しみを受けても菩薩心が固くてこわれず、また、種子や珍宝を秘蔵していてそれで衆生の願いを聞き繁栄させる」という存在であるという。考えてみれば、佐井寺本堂の地蔵たちも、向かい坂地蔵も元は土の中に埋められていた。昔、誰かが、確かに、意志を持ってこれらの地蔵を埋めたということである。

考えてみれば、地蔵は、作ろうと思えば誰だって作れるものである。例えば、早くに死んだ子供で冥土で迷わないようにと、親が心をこめて地蔵を掘って土に埋めたとか、火事で死んだ人々を弔うために「日除け地蔵」を作り、土に埋めるとか…様々な願いの元に作られてきた。しかし、多くの地蔵は、公共の場でのざらしに

なっている。田野登氏の「大阪のお地蔵さん」によれば、今の時代は、地蔵はほとんど処分されておき、地蔵の受難時代にあるという。公共の土地にいるために、開発が進めば処分

されることが多いのである。佐井寺に集められた地蔵も、向かい坂地蔵も、きつと、そんな受難にあったのだろう。しかし、人々に再び祀られることで「再就職」でき、人々の幸せのために働いている。僕にはそう感じられた。向かい坂地蔵の世話をしているという近所のご老人は「この辺りのみんなで面倒をみます。地蔵盆もしています」とおっしゃる。元々は個人のものであった地蔵だが、それはいつしか地域のものとなった。時代を越えて、地蔵と人が日々新しくつながっているのだ。そんなことを思っただけで、向かい坂地蔵を見ると、何だか微笑んでいるようで、とても愛しく感じられてきた。(了)

参考文献

- 「歴史散歩・佐井寺」吹田市立博物館ホームページ
- 「千里山史探検隊 佐井寺の項」ホームページ
- 「吹田佐井寺風土記これ話(一)」藤井久義著 佐井寺自治会発行
- 「わたしたちの町・佐井寺かいわい」吹田市広報室
- 「大阪のお地蔵さん」田野登著 深水社発行
- 「わかりやすい吹田の歴史・本文篇」吹田市立博物館発行
- 「わが町昔さが誌」三善貞司「コミュニティ企画発行